

名勝の維持に対し、一定の役割を果たしてきた地域であり、緑が多く良好な景観を形成し、自然環境の保全の上で重要な地域である。

従って、次に挙げた行為以外の現状変更は、原則として認めないこととする。

ただし、公益上欠くことのできないもので、他の規制地区ではその意義を失うものを除く。

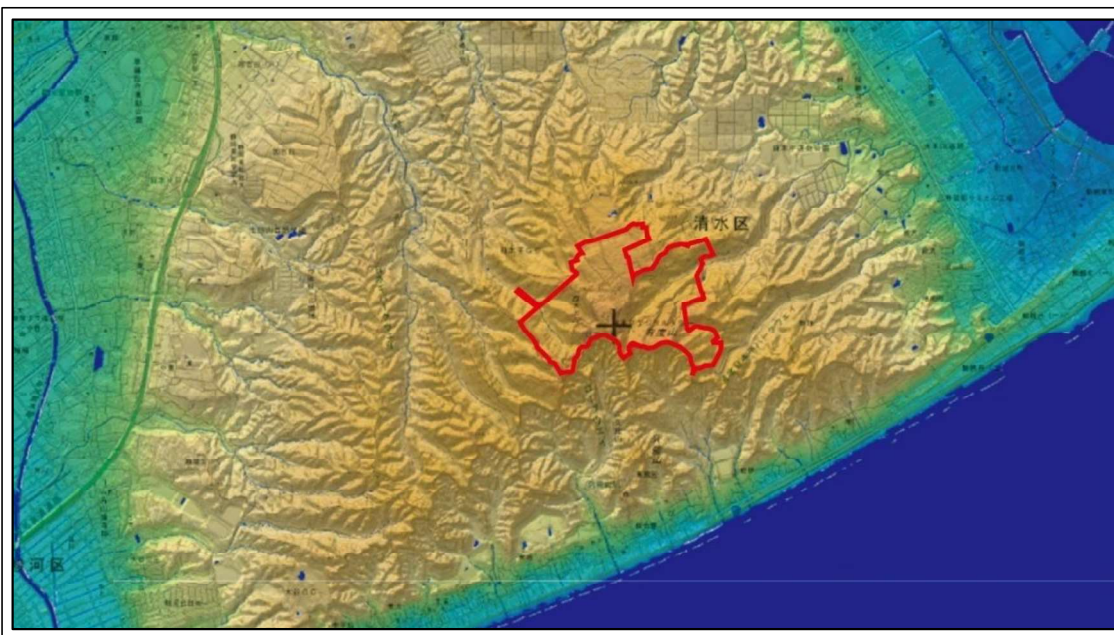
- (1) 災害の防止および人命の安全を確保することを目的としたもの。
- (2) 安全や案内を目的とした誘導看板で、景観に配慮したもの。
- (3) 名勝としての景観・環境を維持し、回復するもので、保存・活用上必要なもの。
- (4) 既存の建築物、工作物において、既存の建築面積と高さ等の規模を超えない改築で、形状ならびに色彩が景観を損なわないもの。
- (5) 展望を妨げる樹木の伐採。

第4節 日本平の自然的環境

1 地形

北東から南西側は、活しゅう曲をあらわす、なだらかな丘陵である。南東から北東側は、浸食によって形成された急峻な崖地である。

日本平の台地面と丘陵斜面、開析谷、南側の侵食崖で構成。名勝中心部の台地面は北西に2度以上の緩やかに傾いた高位段丘面（日本平面）で、緩傾斜に施設が点在するが、局所的な改変にとどまっている。南側の侵食崖は、屏風岩と呼ばれる礫層から成る比高40～50メートルの切り立った崖で、今なお崩落が進行している。



出典：日本平 有度山 地形図 国土地理院w e b サイト
日本平周辺の地形

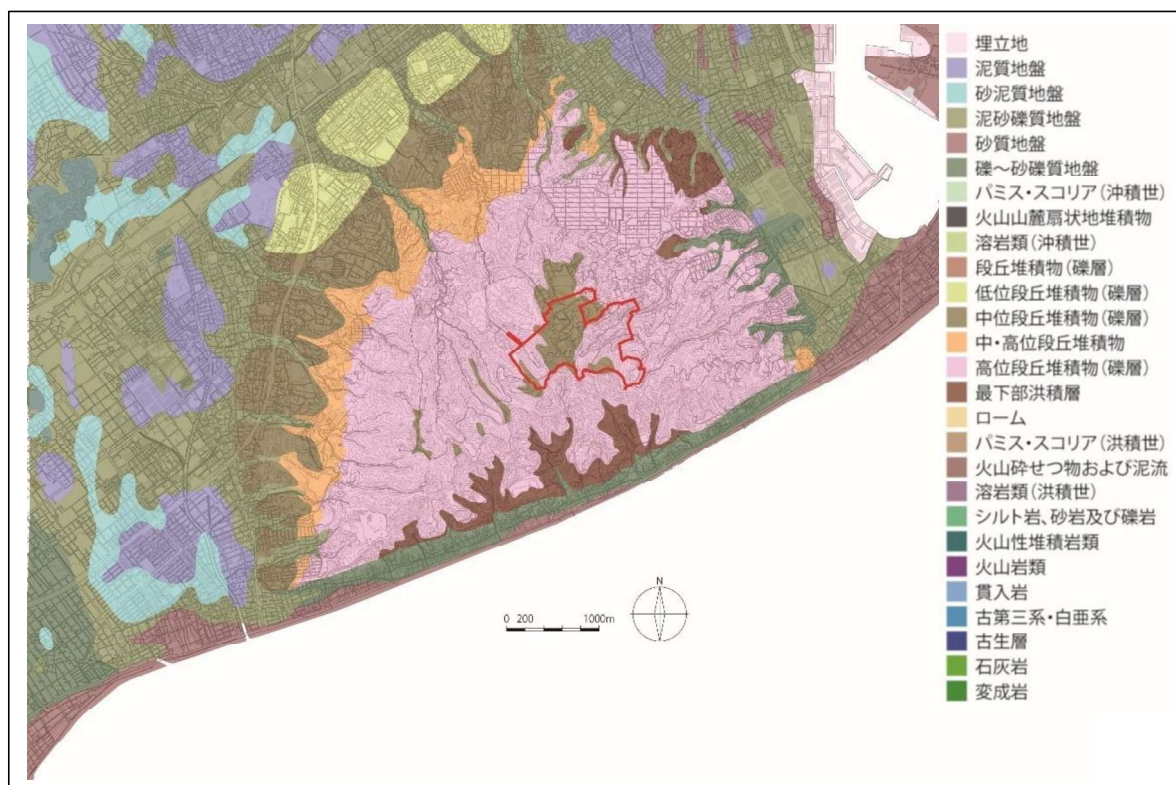


出典：国土地理院地図
日本平山頂周辺の地形

2 地質

有度山は、最下位のシルト等を主とする根古屋累層^{ねごやるいそう}とそれを覆っている厚い礫岩層からできている丘陵で今も隆起し続けている。山頂部は日本平と呼ばれている。

日本平の南側には久能山が急な崖を作っているが、海食によってできた6,000年ほど前の海食崖である。その後、海面が低下したために海岸線との間に平野がつくられた。



出典：ふじのくにオープンデータカタログ 表層地質図

日本平周辺の地質

3 気象、気候

静岡市は温暖多雨の太平洋側気候に属する。市街地の年平均気温は18.1℃であり、全国的にも温暖な地域である。月平均気温は8月が最も高く29.4℃、2月が最も低く7.1℃である。降水量は、梅雨時期と台風シーズンの9月に多くなる。

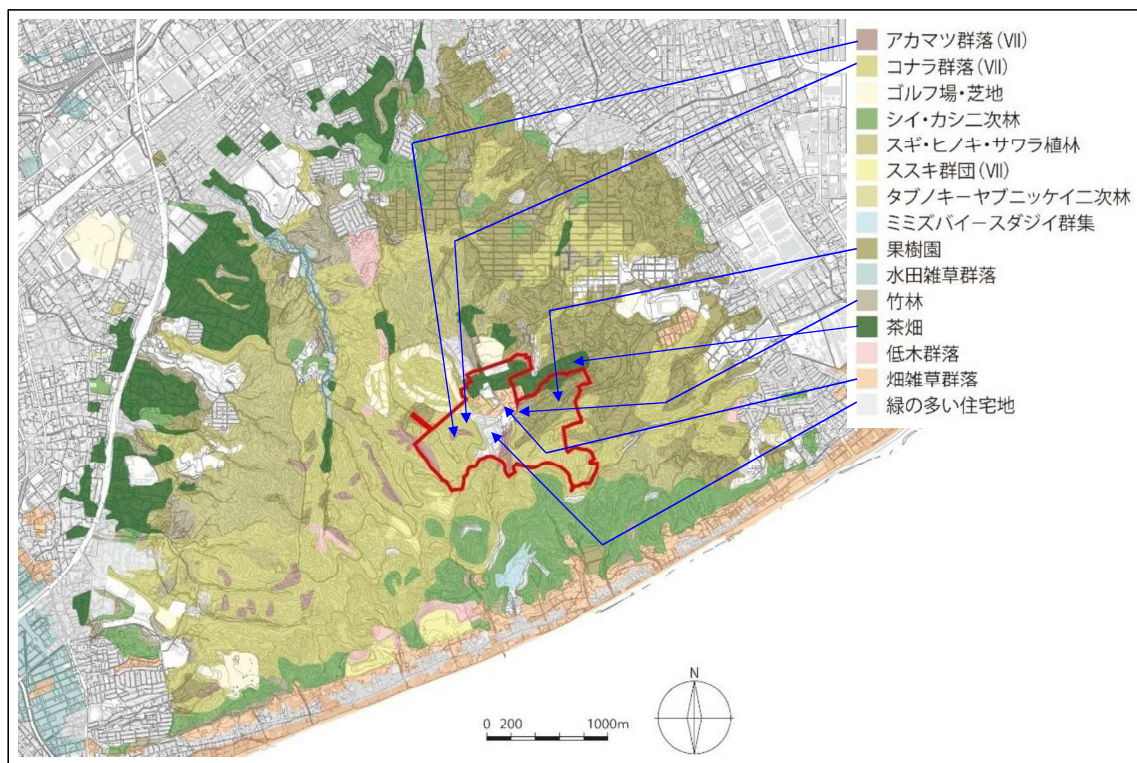
夏は高温多湿で、冬場は雨量が少なく乾燥した日が続く。平野部では、雪はほとんど降らないがオクシズと呼ばれる山間地など標高の高い地域では、積雪も見られるなど、地域によって気候に違いがみられる。

	気温(℃)					湿度(%)		降水量(mm)			
	平均			最高	最低	平均	最小	合計	最大		
	日平均	日最高	日最低						日	1時間	10分間
1月	7.4	12.6	2.8	17	-0.7	55	18	33.5	25.5	12.5	3
2月	7.1	12.5	2	19.9	-1.9	47	13	24	11.5	5	2.5
3月	12.2	16.9	7.6	28.2	2.6	68	11	170	38.5	12.5	2.5
4月	16	20.9	11.8	27.4	6.4	71	22	147.5	55.5	10	3
5月	20	24.3	16	31.8	10.4	73	18	313.5	100	21	7
6月	24.9	28.9	21.6	37.6	16	79	32	203	54	19.5	6
7月	28.2	31.7	25.1	35.3	22.8	79	46	239	128.5	52.5	19
8月	29.4	33.7	26.1	41.4	24	76	34	134.5	52	21	11
9月	27	30.8	23.8	36.1	17.9	76	39	407	241.5	96	30.5
10月	20.4	23.9	17.4	31.9	10.7	77	39	181.5	58.5	34	11
11月	14.2	19.1	9.9	23.8	5.9	67	20	18.5	10.5	3.5	1.5
12月	10.4	15.4	5.9	22.5	0.2	64	21	64.5	21	5.5	2

出典：気象庁（観測点：静岡（静岡地方気象台）

2025 年主な気象データ

4 植物



出典：第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査 環境省生物多様性センター

調査期間：第6回 平成11年（1999年）-平成16年（2004年）

第7回 平成17年（2005年）-調査中

現況植生図

植生は、茶と柑橘類の畑地とスギ、ヒノキの植林地、コナラやハゼノキ、シデ類などからなる落葉樹林、シイ、タブ林などの常緑広葉樹の二次林がほとんどを占めている。一部、人の手の及ばない急峻な場所には、タブノキ、スタジイ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、クロガネモチなどからなる自然の照葉樹林も見られる。久能山東照宮の参道や日本平パークウェイ沿い、山頂の日本平公園内には、ソメイヨシノ、オオシマザクラ、ウメ、ツツジなどの花木が多く植栽されている。

5 動物

野鳥は通年でトビ、キジ、ヒヨドリ、ウグイスが見られ、春から夏にかけては、ツグミ、センダイムシクイなどが飛来する。

昆虫は、ヒョウモンチョウ類などが多く生息する。また久能山のミスジマイマイには、一筋だけの黒い帯をもったものがあり、これをクノウマイマイと仮称しているが、森林層の中には多種類のカタツムリが見られる。

第5節 日本平の歴史的環境

Ⅰ 日本平の歴史

「日本平」の地名は、日本武尊^{やまとたけるのみこと}が山頂から四方を眺めたという神話から名付けたとされている。「草薙」や「馬走」などの地名に代表されるように、日本武尊の東征に因^{ちな}む神話に根差した場所である。

日本平は有度山（307m）の山頂一帯の平坦面を指し、有度山は、元は平坦な地であった場所が、数十万年前に地殻変動によりドーム状に隆起した山である。

有度山南側は太平洋の荒波に侵食され、急な崖を形成している。急崖下に取り残された峰の一つが久能山（216m）である。

南側の急崖は、有度山が隆起したことによってつくられた海食崖である。急崖を作る地層はまだ充分固まっていない礫層からなっているため、侵食作用によって谷壁はそそり立つ絶壁を形成し、「屏風谷^{びょうぶたに}」と呼ばれている。

<古代>

（Ⅰ）縄文時代～弥生時代

日本平を含む有度山の西麓や東麓に古代の遺跡が残り、人々の生活の痕跡が見つかっている。

縄文時代以前については、有度丘陵北麓の清水区草薙の草薙川沿いで13万年前頃の久能山層から、ナウマンゾウの切歯（牙）の化石が見つかっている。また、日本平山頂付近の、日本平遺跡（標高180m、清水区馬走）からは、旧石器時代の細石核や尖頭器が見つかっている。

日本平を含む有度山の西麓や東麓に縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が残り、人々の生活の痕跡が見つかっている。縄文時代は、狩猟採集を中心とする生活であり、住居は山麓のゆるやかな傾斜地などに築かれ、有度山の山麓やその周辺からみつかった縄文時代の遺跡から、当時の生活が山裾部の平らな部分を利用していたことがわかる。また、有度山北麓から西麓にかけては、小河川の流れによって削られたいくつもの谷（開析谷）が存在しており、遺跡の多くは、これらの谷間やゆるやかな傾斜地にある。宮川遺跡^{みやがわ}（駿河区大谷^{おおや}）では、縄文時代早期の押型文土器や石器が発見されている。矢塚坪・門前坪遺跡^{やつかつぼ もんぜんつぼ}（駿河区池田^{しゅうせき}）では、炉跡と推定できる焼け跡が残った集石遺構^{しゅうせき}がみつつかっている。また、駿河区西大谷^{ひるた}の蛭田遺跡（縄文後期～晩期）では、採取した木の実のアク抜きのための水さらし場と推定される跡も確認されている。有度山東麓には、清水天王山遺跡^{てんのうざん}（清水区宮加三^{みやかみ}）があり、住居跡や土墳墓^{どこうぼ}（地面に穴を掘って埋葬する墓）、ドングリなどの堅果類を貯蔵した穴がみつき、多数の土器や狩猟や採集または漁労に使われていた当時の生活の道具類など集落の生活の様相を示す貴重な資料が出土し、うち2,205点の資料が静岡県指定文化財となっている。また、冷川遺跡^{びやがわ}（清水区宮加三）は、縄文時代早期から後期までの土器が出土す

る遺跡で、長野県の霧ヶ峰や東京都伊豆諸島の神津島を産地とする黒曜石が出土しており、他地域との交易を行っていたと考えられている。



天王山遺跡出土遺物一括



冷川遺跡中期配石遺構

弥生時代に入り、弥生時代中期になると静岡・清水平野では本格的な水田耕作が始まり、大規模な遺跡が増加する一方で、有度山の丘陵上でも集落は営まれ、弥生時代中期後半には北麓に五輪平遺跡、西麓には宮川遺跡が確認されている。また、弥生時代後期後半になると、平野部の遺跡は一時的に減少または消滅していく一方で、丘陵裾から台地上に五輪平遺跡や宮川遺跡、上ノ山遺跡などの遺跡が再び増加している。

（２）古墳時代～奈良時代

古墳時代、静岡・清水平野では丘陵の端部などの高い場所に数多くの古墳が造られた。有度山も、とくに古墳時代後期には数多くの小型の古墳群が築かれる一大古墳エリアであった。とりわけ、西麓、北麓に古墳が集中している。

5世紀中葉には、有度山西麓の丘陵部の先端に、池田丸山古墳（駿河区池田）や諏訪神社古墳（駿河区大谷）などの円墳が造られる。6世紀末から7世紀初頭にかけては、駿河丸山古墳（駿河区大谷）、小鹿山神古墳（駿河区小鹿）など、首長墳と考えられる大型の方墳が作られた。これらと並行して、小規模墳が複数築かれる群集墳や、丘陵の斜面に横穴を掘って棺を埋葬する横穴墓が現れる。こうした事例として、静岡大学構内古墳群（駿河区大谷）、宮川古墳群、伊庄谷横穴群（駿河区大谷）などの大規模な墓群がつけられた。

奈良時代になると、聖武天皇の国分寺建立の詔により、有度山西麓の平坦面に駿河国分寺（駿河区大谷）が建立された。また、その南側には瓦を提供したと考えられている宮川瓦窯跡（清泉寺窪窯地点・小段地点）（駿河区大谷）が知られている。



史跡駿河国分寺跡出土鬼瓦



史跡駿河国分寺跡 講堂跡の礎石と瓦出土状況

(3) 平安時代～室町時代

古代にあって日本平は、久能山と一体であり、平安時代には、^{ふだらくせんくのうじ}補陀落山久能寺が^{びょうぶたに}屏風谷を隔てた山頂にあり、屈指の寺院であった。

久能寺は、奈良時代から平安時代初期に遡る創建とされ、観音菩薩信仰の霊場である有度山の一部の久能山頂に置かれていた。久能寺は、平安時代末期には、法華經（久能寺經）が皇族から奉納されるなど、駿河国を代表する寺院であった。有度山には、久能寺への参詣路の入り口として^{へいたくじ}平澤寺が創建された。

中世にあって久能寺の勢力は強大であり、有度山の山麓には^{へいたくじ}平澤寺などの久能寺の支院が建ち、強大な勢力を誇った。久能道西などの地名からわかるように、久能寺参詣道が日本平を通っていた。

中世末には、永禄11年（1568）、に久能山に武田氏が城を築き、南麓久能街道及び水運行動の監視を行ったと考えられ、久能寺は境内地を有度山東麓の清水区村松に移動させられた。



平澤寺

（４）戦国時代～江戸時代

武田氏は、久能寺を山下へ移した跡地に久能山城（駿河区根古屋）を築いた。その後、徳川家康は、元和2年（1616）4月17日に駿府城で息を引き取り、久能山に埋葬され、現在の久能山東照宮となった。家康の廟である東照宮が造られるようになると、日本平から久能山への連絡は急速に色あせてしまう。

（５）江戸時代（「日本平」の名称初出）

日本平からの良好な眺望を記録した文献は、江戸時代末の安政年間（19世紀半ば）までに書かれたといわれる『寿留嘉土産』（日本平の呼称初出）を嚆矢とする。西尾市岩瀬文庫ホームページによると、『寿留嘉土産』は、駿府奉行として着任した幕臣の貴志孫太夫忠美が、任地駿府（現・静岡市）周辺の風景を写生した彩色画卷である。（『寿留嘉土産』西尾市岩瀬文庫蔵）（『日本平の謎を追う』静岡県立庵原高等学校郷土研究部 2000 年 参考）



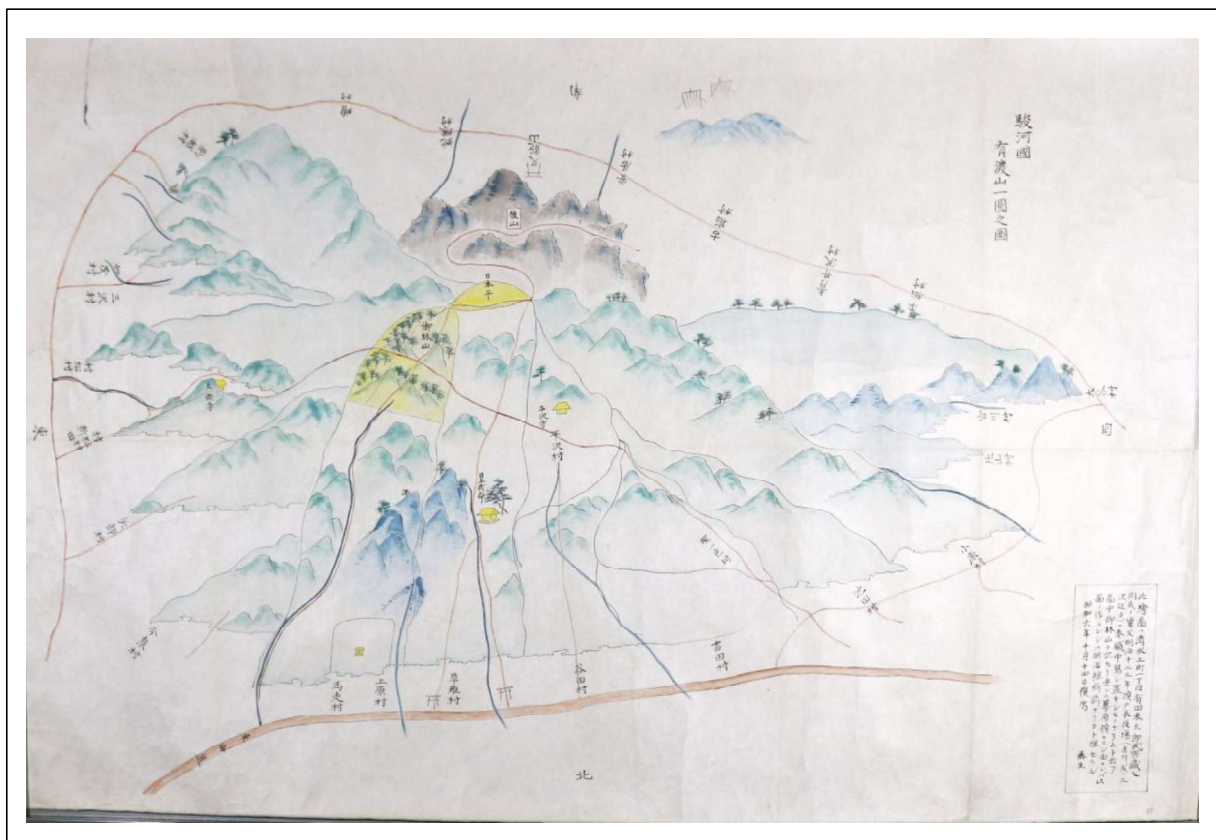
『寿留嘉土産』上巻（西尾市岩瀬文庫所蔵）本資料の転載・複製禁止

画面には、「（前略）照久寺澤谷より有度山尔登り、峰平日本平尔至り、時雨霧山、府中、遠江七十里灘 海上東方清水湊 三保ヶ崎 伊豆能山々 富士山 二月十七日於日本平寫」とあって、不詳である筆者が、照久寺から日本平に登り、静岡市街から駿河湾西部、東の清水、伊豆、富士山を眺めていて、明治維新前夜にはそこからの眺望に価値が認められていたことがわかる。ただ、そのころ山頂部は、草薙神社領であったようである。

（６）近代

（明治）

明治12年（1879）頃の『駿河國有渡山一圓之圖』には、その中央に「日本平」の名称が見え、平澤寺、日本武尊、久能寺、（もう一か所千手寺か）を描いており、傍らの主な登山道を案内している。寺社の配置からかつての久能寺参詣道と同じである。



『駿河國有渡山一圓之圖』全体図（静岡市立清水中央図書館所蔵）



『駿河國有渡山一圓之圖』日本平付近拡大部分（※図中の赤線が登山道）（静岡市立清水中央図書館所蔵）

(大正)



「大正4年久能山附近案内図」(静岡県立中央図書館所蔵)(部分)

大正15年(1926)4月3日に草薙駅が開設され、昭和2年(1927)5月には、東京日日新聞主催の「日本新八景と日本百選」で日本平が平原の部で百選に入選し、その名を一躍有名にするに至った。

これと前後して、徳富蘇峰の活動が日本平の名を周知させた。彼は、大正11年(1922)11月17日に、逗留先の鉄舟寺から、杉原山(清水区村松)に登り、そこからの富士の眺めを絶賛し、「富士見台」と名付けて、詩碑を大正15年10月24日に建立した。

また同年、蘇峰ははじめて日本平に登り、その眺めを「天下の絶景」と評した。

(昭和)

昭和4年(1929)『日本風俗体系 東海地方』には、「(前略)その山頂三百メートルの所には日本平と称する景色の良い平らがある。余りよく知られていないが、日本にも多くはあるまいと思われる景勝地である。」とあり、この当時、日本平は衆目の知る所とまでは言えないものの、一部の人々には景勝地の価値が認められるようになってきたようである。

昭和10年(1935)2月には、徳富蘇峰が選んだ展望地点4か所(吟望台、鐘秀台、超然台、望嶽台)に石碑を建立している。中でも久能よりの鐘秀台からの静岡市街地や御前崎灯台までの眺めに注目している点は見逃せない。蘇峰も日本平からの四周の眺望にその特質をみている。

徳富蘇峰が日本平を賞賛して以来、日本平に関する新聞記事がたびたび掲載されることとなる。

昭和6年（1931）6月13日『静岡民友新聞』

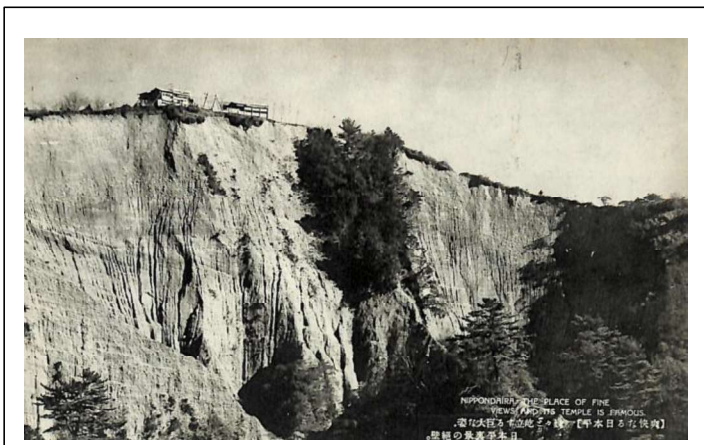
「日本平に俄造りのお茶屋 清水市から取締方を請願」

「天下の名勝地である日本平は、最近各方面からの宣伝が多大に功を奏し遊覧者が激増すると共に現に営業をしているのが三軒、建築中のが2軒あり折角の眺望をきづつけ風致を台無しにしてしまう恐れがあるというので、清水市では 12 日県知事に対し、日本平を史跡名勝天然記念物保存法第1条第二項によりその指定地となし充分なる取り締まり方を請願した。」

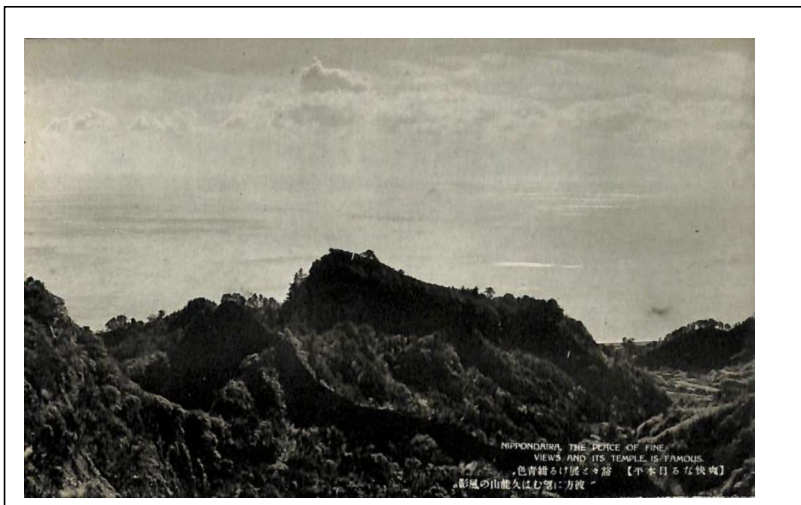
（『清水市史資料 現代』より）



日本平頂上売店（静岡県立中央図書館所蔵）静岡県の絵葉書



「爽快なる日本平」 巍々と屹立する巨大な姿。日本平裏景の絶壁（静岡県立中央図書館所蔵）静岡県の絵葉書



「爽快なる日本平」 豁々と展ける紺青色。彼方に望むは久能山の風影。
(静岡県立中央図書館所蔵) 静岡県の絵葉書

昭和 10 年 (1935) 12 月 1 日「静岡民友新聞」

「日本平にも春 サービスガールを置く」

「日本平も清水市保勝会を始めその他関係各方面で極力宣伝につとめた結果昨今では漸く全国的の日本平となり清水を訪れる団体といわず個人といわず必ず登山し、雄大な眺望にみとれるが頂上に登山者を慰安すべき設備なく遺憾とされていた折柄開発者の一人である鈴木喜重氏が奔走し一日から無料で登山記念スタンプを押す外事務所にサービスガールを常置し気分をよくすることにした。」(『清水市史資料 現代』より)

昭和 12 年 (1937) 2 月 11 日「静岡民友新聞」

「日本平の頂上に緑地帯を設く ドライブ道路と共に」

「清水市都市計画課では本県都市計画課と協力し工費 10 万円を投じ日本平の頂上、中段、東段、平段、大谷津の一带に緑地地帯を設計、巾 3 間のドライブウエーでこれを結びつける計画をたて目下準備中であるが、これが実現を期待されている。」(『清水市史資料 現代』より)

昭和 12 年 4 月 17 日「静岡民友新聞」

「日本平公園 内閣から認可さる」

「日本平公園 位置 清水都市計画公園及び同事業ならびにその執行年度割は左のごとく決定し、4 月 9 日内閣の認可を得て内務省から 16 日告示された

名称 日本平公園

位置 清水市駒越、村松、北矢部及び安倍郡有度村大字草薙、馬走各地内地積約 88.50ha 設備 園路、広場、四阿、その他公園一般施設

執行年度 12 年度 約 6 分

13 年度 約 9 割 4 分」(『清水市史資料 現代』より)

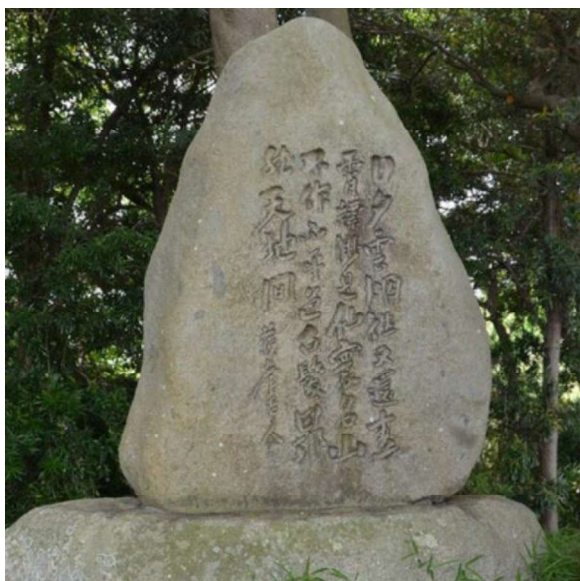


日本平ハイキングコース（静岡県立中央図書館所蔵） 静岡県の絵葉書

2 徳富蘇峰と日本平

徳富蘇峰（1863～1957）は、明治・大正・昭和の三代にわたって活躍したジャーナリストである。蘇峰は昭和3年（1928）、66 歳のとき『名山遊記』を著した。蘇峰は富士山を眺めるのが大好きで、その序に「何れの方面を旅行するも、恆に富士山を目標としている」と記している。大正 10 年（1921）以降、蘇峰はたびたび清水へ来て、鉄舟寺に泊っている。翌大正 11 年（1922）、清水区村松の杉原山に登り、そこからの富士の眺めを絶賛して「富士見台」と名付けた。その後詩碑建立の話が出て、月庵和尚や清水の青年らの尽力で寺に隣接する小丘、杉原山の頂上に建てることとなったが、大正 12 年（1923）の関東大震災のため中断される。

大正 15 年（1926）10 月 24 日、静岡県知事、清水、静岡両市長をはじめ大勢の人々が集まって盛大に建碑式が行われた。当日、蘇峰は東京から子・孫など総勢 21 人を連れて参列している。鉄舟寺山門にはアーチが設けられ花火も上がり、時ならぬ群衆に祝福されて杉原山で除幕式が挙行された。「名山遊記」に「当面には薩埵、清見関の上に、富士山がそびえ、眼下に三保の松原が横たはり、駿河湾から箱根、天城、伊豆の半島一帯は、風帆出没の間にある」と、その眺めをほめている。昭和 44 年（1969）には、この土地が蘇峰の孫徳富敬太郎氏より清水市に寄贈され、公園となっている。



杉原山山頂の「富士見台」徳富蘇峰詩碑

杉原山の徳富蘇峰詩碑の碑面

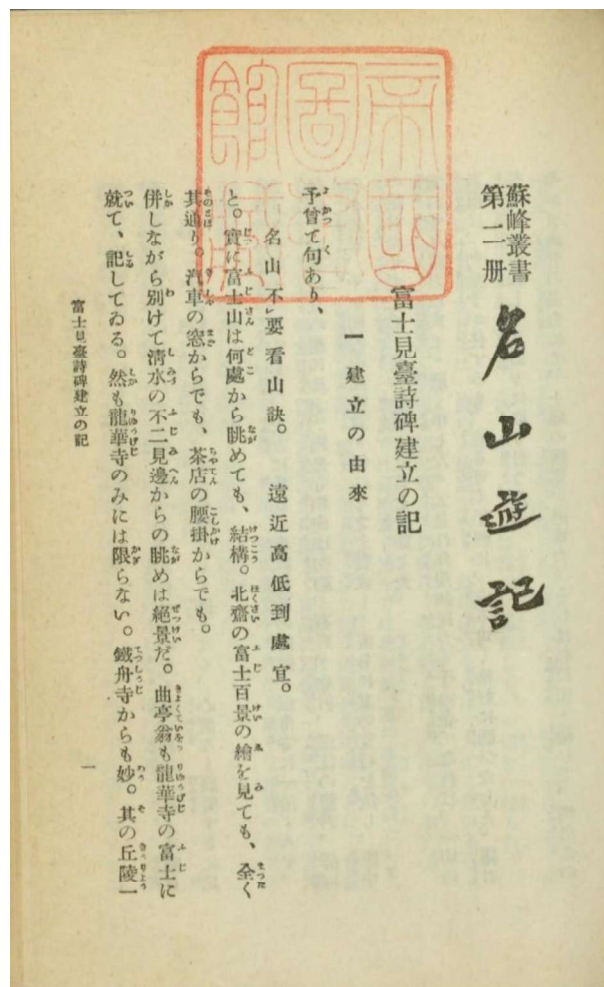
「日夕雲烟往又還
青霄縹緲是仙寰
名山不作不平色
白髮昂然天地間
蘇峰老人」

碑背の跋文

「富嶽者我大日本之鎮護也神
秀氣崇巋然卓立於東海之表
而斯地也形勝尤適望嶽乃為
賦一詩勒貞珉以志景仰嗟呼
予百歲之後魂乎徜徉其長在
此也夫

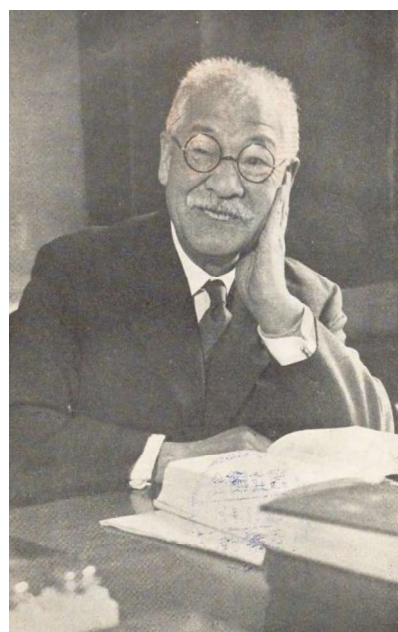
大正十五稔七月

蘇峰 徳富正敬」



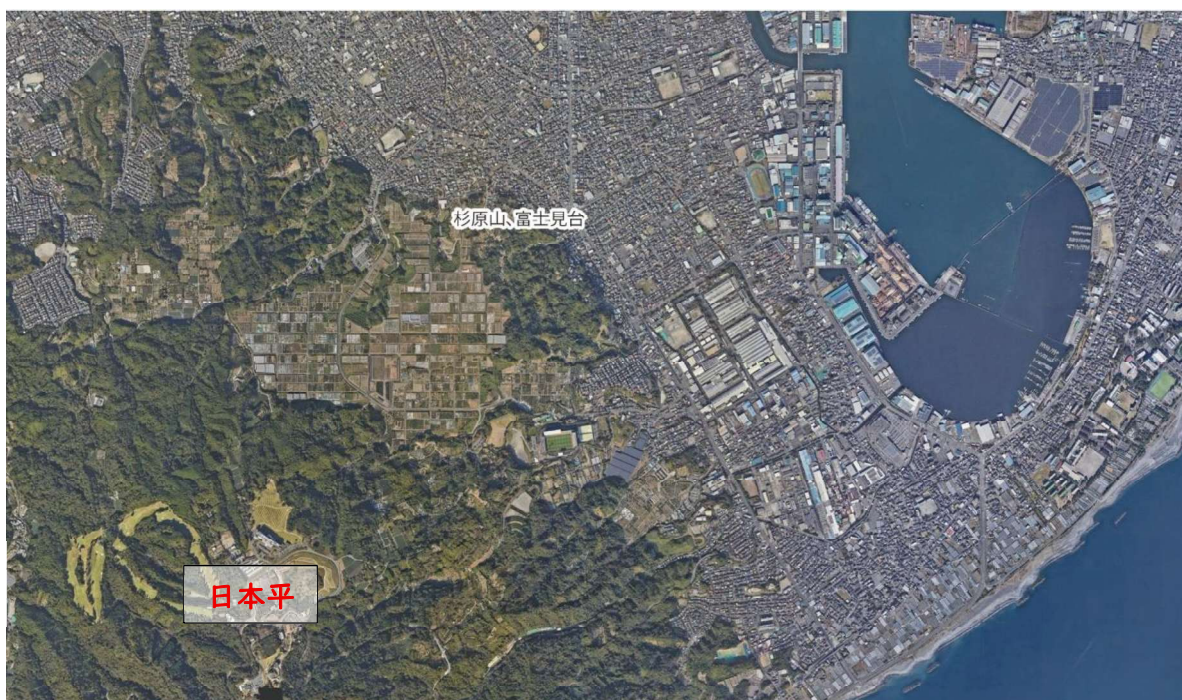
出典：国立国会図書館「名山遊記」
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1193842/1/7>)

徳富猪一郎（蘇峰）民友社 昭和3年



出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

徳富蘇峰 写真



出典：グーグルマップ

杉原山位置図

大正 15 年（1926）10 月 25 日、蘇峰夫妻らは小鹿^{おしか}で松茸刈りを楽しんだ後、草薙神社に参る。そしてその後、日本平へ向かう。蘇峰は日本平を絶賛して言う。「其の眺望に至りては、・・・実に天下第一と申しても差し支えあるまいと思う」と。また「予は斯かる勝地を、此の儘放^{ままほうほう}抛しつつある静岡県人士の、心持が分からぬ」と言っている。

この紀行は、国民新聞の大正 15 年（1926）11 月 4 日号にさっそく掲載され、当時まだ全く知られていなかった「日本平」の名を全国に広めることとなった。そして翌昭和 2 年（1927）東京日日新聞が主催し懸賞付きで「日本新八景」の選定がおこなわれることとなり、日本平はその候補地にあがることとなった。これを受け郷土愛に燃えた「有度村草薙青年団」は、「日本平保勝会」を設立し、票の獲得に奔走した。そのおかげで、「新八景」は逃すものの、平原の部「日本百景」として日本平は入賞し、観光地として脚光を浴びることとなった。

いっぽう昭和 4 年（1929）にアメリカからおこった世界恐慌のあおりを受け、清水市も倒産する企業や失業者が続出した。清水市は失業者対策事業として、日本平山頂まで車で登れるよう、日本平登山道路を計画し、昭和 5 年（1930）から登山道路を作り日本平観光の発展をはかることとなった。そして徳富蘇峰に委嘱して 4 か所の眺望のよい場所を選んで、命名してもらった。昭和 10 年（1935）その 4 か所に、石柱が建てられた。「望^{ぼう}嶽^{がくだい}台」「超^{ちょう}然^{ねんだい}台」「鐘^{しょう}秀^{しゅう}台」「吟^{ぎん}望^{ぼう}台」である。（『人物が彩る清水』平成 14 年清水市教育委員会より一部抜粋）

國民新聞

静岡遊記 (二)

天下の絶景日本平

蘇峰生

此から山を下り、道を東海道へとり、更に草薙神社に至る。此處は有度村にて字草薙と云ふ。延喜式内の縣社である。日本武尊が、東國お下りの節、賊起りて野に火を放つたが、尊剣を抜いて之を鎮め給うたのは、即ち此の地方であること云ひ傳へてゐる。その所縁の草薙村、その所縁の草薙神社。

社前には有度村戸塚助役、社司、小學校長、其他諸有志出迎られた。社内は老木鬱蒼、特に八十幾尺と云ふ楠の、空洞を剩し、その中から新樹を生じてゐるのは、尤も奇抜だ。但だ此程の神社にして、何等舊記、古文書の見る可きものなきを遺憾とする。

此れから愈よ日本平に向ふ。此處は日本武尊が草賊を平げ、四方を詠め給うた地と稍せられてゐる。有志諸君は、予及び老妻の爲め、途中迄、自転車の後につくる荷物車二個を用意せられた。折角の厚意なれば感謝して乗った。

日 四
後 貳 金 幣 定 刊 ク
正 永 壽 伊 人 創 刊 社 行 發
町 賀 加 郡 宮 崎 東 東 所 行 發
社 團 新 民 福 社 會 式 株



『國民新聞 大正15年(1926)11月4日夕刊』 「静岡遊記(二)」徳富蘇峰
この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

「静岡遊記 二 天下の絶景日本平 蘇峰生

これから山を下り、道を東海道へとり、更に草薙神社に至る。此處は有度村にて字草薙と云ふ。延喜式内の縣社である。日本武尊が、東國お下りの節、賊起りて野に火を放つたが、尊剣を抜いて之を鎮め給うたのは、即ち此の地方であること云ひ傳へてゐる。その所縁の草薙村、その所縁の草薙神社。

社前には有度村戸塚助役、社司、小學校長、其他諸有志出迎られた。社内は老木鬱蒼、特に八十幾尺と云ふ楠の、空洞を剩し、その中から新樹を生じてゐるのは、尤も奇抜だ。但だ此程の神社にして、何等舊記、古文書の見る可きものなきを遺憾とする。

此れから愈よ日本平に向ふ。此處は日本武尊が草賊を平げ、四方を詠め給うた地と稍せられてゐる。有志諸君は、予及び老妻の爲め、途中迄、自転車の後につくる荷物車二個を用意せられた。折角の厚意なれば感謝して乗った。

身は宛も是れ杜樊川の『遠上寒山石逕斜』の詩中の光景裡にある。但だ此の炭屋の小僧さんや八百屋の小僧さん達が、お得意の家へ、その註文物を運ぶ車に、老人夫妻を乗せ、挽き行く様は、山中であればこそ。若し此れが銀座街頭ならば、全く乞食爺と乞食婆以上の値踏はせられまい。

此邊亦た茶畑が多い。山を拓き、小石を積み、段々畑を作りてゐる。やがて車を捨て、石逕を上り行く。上るに従ひ、茶畑は一變して、野菜畑となり、菜や、人参や、白菜や、大根の類がある。上りつむれば、乍ち駿河灣から伊豆半島を見る。而して大なる峻谷を隔て、削り成したる如き孤峰が、久能山だ。

我等は一步踏み外せば、數百尺の谷底に墜落す可き、馬脊の如き小笹茂れる小徑を通り、漸く日本平に近きつゝ行く。やがて松山やら、小篠野を過ぐれば、一望涯なき茶や、大根畑に出づ。此れが所謂る日本平だ。

此の山上の平地が、幾町歩あるやを詳にせざるも、餘程廣き面積がある。少なくとも大觀兵式位は出来さうにある。而して其の眺望に至りては、賴山陽が耶馬溪ではないが、實に天下第一と申しても、差支あるまいと思ふ。

何たる仕合であらう。富士は全身を露はしてゐる。我等は遠州の御前崎から、伊豆の石廊崎まで、殆んど残る限なく展望するを得た。薩陞嶺や、清見關や、興津や清水や、三保や、静岡や、龍爪山や、文殊山や、安倍川や、大井川や、若しくは天城山や、箱根一帯の山や、悉く指顧の中にあつた。老妻は十國峠の眺望以上だと申したが、予も或は然らんとした。

諸君は予に向て、戯れに此處にも詩碑は如何かと云ふから、人間は足るを知ると貴ぶ。杉原山にてさへも、餘りに結構過ぎると思ふ。まして斯る天地の大文章に對しては、人間は唯だそれに隨喜感悦すれば澤山であると、笑つて答へた。

予は斯る勝地を、此儘放抛しつゝある静岡縣人士の、心持が分からぬと申したい。之を大遊園地とするの可否などを議論するよりも、せめて此の日本平に上る道を作り、道標にて立てたらば、如何かと思ふ。而して此文を読むの君子も、予に誑された積りにて、必らず一度來觀せられよ。予は獨り自から斯る好景を私するに忍びず、敢て之を天下同好の君子に告ぐ。

予は返す返すも諸君が、予を日本平に案内せられたるを謝す。實は足痛の爲めに、プログラムを取消んとの議もあつたが、予は好景と聞いては、脚の一本位は失うてもと申したから、諸君も喜んで案内せられた。凡そ世の中に馳走と云ふ馳走の中にて、好景を觀る程、有り難きものはない。

(大正十五年十月二十六日午前六時 静岡大東館に於て)
